

日本語の格助詞の使い分けとトルコ人日本語学習者の誤用の考察

——「で」と「に」に関する日本語とトルコ語の対照研究——

DALKIRAN Ayşe Nur*・許 夏 玲**

留学生センター

(2013年9月13日受理)

1. はじめに

日本語の格助詞の使い分けに関しては、日本語学においても日本語教育においても極めて重要な研究課題であり、これまで多くの研究がなされてきた。しかし、日本語とトルコ語は類似した文法形式を持つにもかかわらず、格形式をテーマとした対照言語学的な研究は管見の限りまだなされていない。格形式の学習は、トルコ語を母語としている日本語学習者が困難に感じる項目の一つであるという現実がある。そこで、トルコ語の格形式との対照分析を通して、日本語の格助詞、とりわけ「で」格と「に」格の誤用分析を行った。

本研究では、まず、日本語の格助詞の中でも特に使い分けが難しいとされている「で」格と「に」格の用法とそれらの用法に対応するトルコ語の格形式を明らかにし、次にトルコ人日本語学習者の「で」格と「に」格の使い分けに見られる誤用とその誤用に見られる傾向を分析することを目標としている。

2. 先行研究

2. 1 日本語の格助詞について

これまでの日本語の格助詞に関する先行研究は認知言語学の観点からの研究が多く、代表的なものとして、菅井(1997, 2007)、森山(2004, 2008)、岡(2005)が挙げられる。

まず、「に」格の用法は極めて多様であり、その意味・役割の範囲に関する見解さえも一致していない。例えば、国立国語研究所(1997:119-165)では延べ27種類の深層格を示している。深層格(Deep Structure Case)とは、述語に対する働きによって分類された格のことである(『日本語教育辞典・新版』2005)。林(1992)では、15種類の用法が挙げられ、菅井(2007)では14種類の用法が挙げられている。菅井(2007)は「に」格の用法を概観し、機能的な修飾関係を示す用法があると示している。

一方、従来の研究では、「で」格の用法に関する記述は少ない。しかし、「で」格の用法は多様である。森山(2004)では、「で」格の用法のカテゴリーにおいて、19種類の用法が挙げられている。

本研究では、先行研究の中でも詳しくかつ妥当な分類方法でまとめられた菅井(2007)の「に」格の用法カテゴリーと森山(2004)の「で」格の用法カテゴリーに従い、これらの用法に対応するトルコ語の格形式との対照分析を試みた。以下、菅井と森山のカテゴリーを提示する。

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程
** 東京学芸大学留学生センター(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

「に」の用法カテゴリー (菅井 2007)

- (1) a. [方向] 例：針金を内側に曲げる。
 b. [到達点] 例：壁にボールを投げる。
 c. [密着点] 例：手にインクが付いてしまった。
 d. [収斂先] 例：スープに調味料を入れる。
 e. [存在点] 例：正門に警備員が大勢いた。
- (2) a. [目的] 例：花子を食事に誘った。
 b. [伝達先] 例：子供に行儀作法を教える。
 c. [要素] 例：音楽の才能に満ちている。
 d. [結果] 例：幼虫がさなぎになった。
 e. [経験者] 例：この問題は太郎にも解ける。
- (3) a. [起点] 例：友達に参考書を借りる。
 b. [動作者] 例：両親に結婚を反対された。
 c. [原因] 例：余りの熱さに気を失った。
 d. [時間] 例：早朝5時に集合した。

「で」の用法カテゴリー (森山 2004)

1. <道具> : 道具, 手段, 材料, 媒体構成要素
2. <原因> : 原因, 理由, 根拠, 動機
3. <場所> : 場所, 場 (抽象的场所, 場面)
4. <機能> : 動作主・対象の様態, 作用・できごとの状態
5. <限定> : 範囲, 数量限定, 期間, 時限定
6. <時間> : 時間
7. <動作主> : 動作主, 動作集団

日本語の格に関する先行研究での共通の問題点は、深層格の決定などの点で見解が統一していないことである。また、認知言語学の観点から日本語の格助詞の体系化を中心としている研究の多くは、母語話者の言語直感(内省)を判断の基準に頼るものであるため、森山(2008)が述べたように、更なる実証的な検証が必要となっていると言えよう。

2. 2 トルコ語の格形式について

本研究では、トルコ人の日本語学習者に対するアンケート調査を通して、格体系に関する言語理論の応用の可能性について考察する。

トルコ語の格に関する代表的な先行研究として、Ergin (2006), Korkmaz (2007), Banguoğlu (2007)などが挙げられる。トルコ人や外国人の研究者によって提唱された格カテゴリーの分類に関する見解はほぼ一致しており、異なる解釈は少ないと言える。トルコ語の文法に関する研究では、格のテーマは主に形態の面から考察されることが多く、また語尾のレベルで捉えられており、いくつかの共通の用語として使用されると述べられている(çekim eki[曲用語尾], durum ekiまたはhal eki[格語尾]等)。トルコ語では概念の関係はたいてい「曲用語尾/格語尾」と名付けられる文法の形態成分によって示されると説明されている。これらの見解は、もっぱら表面的な構造から説明され、格のカテゴリーを表す成分の一つである「語尾」もただ形態面からのみ名付けられている。そこで名詞の格変化の解釈まで影響を及ぼし、研究者によっては格語尾の種類に対する解釈は5種類から9種類と異なっている。その結果、同じ深層構造を表す二つ以上の表層構造が、違う形式として分析されるため、言語教育の場において格体系の指導及び理解に不可欠な方法である体系的な分類を実現させることが困難になり、指導の際に格カテゴリーが重要視されなくなってしまうと考えられる。トルコ語母語話者が日本語の格助詞を学習する前提として、まず母語であるトルコ語の格語尾への理解が不可欠となっている。

トルコ語と日本語の対照研究の先行研究は管見の限りあまりない。このことから、日本語の研究だけではな

く、まず母語であるトルコ語への理解を深め、対照研究の観点から更なる考察が必要となってくると思われる。

3. 研究調査について

3. 1 調査対象者

2010年4月21日に、トルコ共和国チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学 (Çanakkale Onsekiz Mart Üniversitesi) で、日本語教育専攻のトルコ人日本語学習者を対象にアンケート調査を行った。調査対象者数は、予備課程20人、1年生15人、2年生20人、3年生15人、4年生20人の合計90人である。予備課程とは、日本語教育学専攻に入学後、日本語のみを学ぶ1年間の日本語学習課程である。今回の調査は、年齢差や地域差を問わず、日本語教育を専攻にしている学習者全員にアンケートを配布した。また、各学年の学習者の日本語能力レベルは学生によって異なるが、一般的には予備課程終了時点で旧日本語能力試験3級レベル (初級)、2年生終了時点で同試験2級レベル (中級)、3年生と4年生は2級及び1級レベル (中級と上級) を有していると考えられる。

3. 2 分析目的及び分析方法

本研究には2つの目的がある。第1の目的は、日本語の格助詞の中でも特に使い分けが難しいとされている格助詞「で」と「に」の用法を示し、それぞれの用法に対応するトルコ語の格語尾を提示することである。第2の目的は、日本語を使用する機会が極めて少ない環境で学習しているトルコ人日本語学習者の格助詞の使い分け、その中でも特に「で」格と「に」格の使い分けにおける誤用を分析し、以下の点を明らかにすることである。

1. 学習者の誤用にはどのような傾向がみられるのか。
2. どの用法での誤用が起りやすいのか。
3. 誤用と思われる要因は何か。

まず、本研究では質的分析及び量的分析の方法を用いた。質的分析では、菅井 (2007) の「に」格の用法カテゴリ及び森山 (2004) の「で」格の用法カテゴリの中の用例に基づいて、それらに対応するトルコ語の格語尾との対照分析を行った。量的分析では、トルコ人日本語学習者にアンケート形式で問題を提示し、その回答をもとに誤答数・誤答率の表を作成し、誤答の傾向を分析した。また、量的分析ではクラスター分析方法を使用した¹⁾。これによって、学習者の回答をもとに作成した樹状図を使用し、学習者の誤答の傾向をより詳しく考察できると考えた。

順番としてまず、第三部の選択肢問題で得られた誤答、次に、第四部の穴埋め問題で得られた誤答を基準に作成したそれぞれの誤答数・誤答率表を使用し、誤用の傾向を考察した。また、問題別の樹状図 (デンドログラム) を使用し、第三部の選択肢問題の性質相違及び学習者の誤答の傾向にみられる学習者の助詞の使い分けについて分析した。最後に、学習者別の樹状図を使用し、第三部の選択肢問題で得られた学習者の回答の相違について分析した。

3. 3 調査項目の作成

調査の方法は、アンケート記述方式を用いた。第一部はトルコ人日本語学習者の性別、学年、日本語能力試験受験の有無、日本語能力試験合格の有無、日本語能力試験の合格レベル、一週間に受ける日本語の授業の時間数、日本語のレベルに対する自分自身の内省、日本語の授業で使用している教科書名等に関する質問項目、第二部は300字以内の作文、第三部は30問の選択肢問題、第四部は30問の穴埋め問題からなっている。アンケート用紙を作成する際、予備課程の日本語の授業の教材『みんなの日本語 I・II』を使用した。問題項目の中には助詞「で」と「に」だけでなく、「を」や「が」なども混ぜ、学習者が「で」と「に」だけが問われることに気付かれないように配慮した。

4. 分析結果

日本語とトルコ語は文法構造上共通点が多い言語であるとされている。例えば次の例を見てみよう。

- (1) Kütüphane -den kitap ödünç al -dı -m.
 (逐語訳) 図書館 奪格 本 借りる 過去 1人称単数
 (訳文) 図書館から本を借りた。

上記の例でも見られるように、トルコ語と日本語の語順はほぼ同じである。しかし、文法構造が似ている言語とは言え、格助詞の細部の意味には違いがある。格助詞に関する本研究の分析結果は以下のようにまとめられる。

4. 1 質的分析の結果

意味と形式の組み合わせにおいて誤用が生じるものには、1. 意味と形式の相違, 2. 形式のみの相違, 3. 形式の種類相違, という3つのパターンがみられた。

4. 1. 1 「で」格

4. 1. 1. 1 「で」格とそれに対応するトルコ語の語尾の意味と形式の相違

日本語の「材料」, 「範囲」, 「数量限定」, 「動作主・動作集団」の用法を表す「で」格とそれに対応するトルコ語の奪格の格語尾 (-den), 属格の曲用語尾 (-(n)ın), 与格の格語尾 -(y)e, 主格の格語尾を伴わない(φ)ゼロ格は、意味及び形式上違いため、混同及び誤用が起りやすい。

- (2) Şarap üzüm -den yap -ıl -ır.
 (逐語訳) ワイン ぶどう 奪格 作る 受身 アオリスト3人称単数
 (訳文) ワインはぶどうで/から作られる。
- (3) Dünya -nın en yüksek dağı Everest' -tir.
 (逐語訳) 世界 属格 一番 高い 山 エベレスト アオリスト3人称単数
 (訳文) 世界で一番高い山はエベレストだ。
- (4) Bu televizyon -u otuz bin yen -e al -dı -m.
 (逐語訳) この テレビ 対格 三十 千 円 与格 買う 定過去 1人称単数
 (訳文) このテレビを三万円で買った。
- (5) Uzun süren yaz tatili de yarın φ bit -ecek.
 (逐語訳) 長かった 夏休み も 明日 ゼロ格 終わる 未来3人称単数
 (訳文) 長かった夏休みも明日で終わります。

4. 1. 1. 2 「で」格とそれに対応するトルコ語の語尾の形式の相違

日本語の「道具」, 「手段」, 「原因」, 「理由」, 「根拠」, 「動機」, 「動作主・対象の様態」, 「作用・できごとの状態」のそれぞれを表す「で」格とそれに対応するトルコ語の「～と(一緒に)」、「～を使って」の意味を表す共同・手段格の格語尾 ("ile" /-(y)le/, /-(y)la/), 後置詞的な表現である (için) 「～のため」, 「～ので」, (nedeniyle) 「～の理由で」, (sebebiyle) 「～の原因で」, (yüzünden) 「～のせいで」, (bir şekilde, bir biçimde, bir halde) 「～の状態で」「～の様態で」は形式上違いため、混同及び誤用が起りやすい。

- (6) Türk -ler φ pilav -ı kaşık ile yer -ler.
 (逐語訳) トルコ人 複数 主格 ピラフ 対格 スプーン 手段格 食べる 3人称複数
 (訳文) トルコ人はピラフをスプーンで食べる。

- (7) Gemi (ler), ϕ kasırga sebebi -(y)le liman -dan çık -amı -yor.
 (逐語訳) 船(複数) 主格 台風 の原因 で 港 奪格 出る 不可能 現在
 (訳文) 船は台風で港から出られない。
- (8) Çocuk -lar kumsal -da çıplak hal -de oynu -yor -lar -dı.
 (逐語訳) 子供 複数 海岸 処格 裸 様態 処格 遊ぶ 現在 3人称複数 過去
 (訳文) 子供達は海岸で裸で遊んでいた。

4. 1. 2 「に」格

4. 1. 2. 1 「に」格とそれに対応するトルコ語の語尾の意味及び形式の相違

日本語の[要素], [結果], [経験者]それぞれの用法を表す「に」格とそれに対応するトルコ語の共同・手段格の(“ile”, /-(y)le/, /-(y)la/)及び格語尾を伴わないゼロ格(ϕ)は、意味及び形態上違うため、学習者にとってその使い分けが難しくなる。

- (9) Bu öğrenci ϕ müzik yeteneği ile dolu.
 (逐語訳) この 学生 主格 音楽 才能 手段格 あふれる現在3人称単数
 (訳文) この学生は音楽の才能にあふれている。
- (10) Tırtıl ϕ pupa ϕ ol -du.
 (逐語訳) 幼虫 主格 さなぎ ゼロ格 なる 過去3人称単数
 (訳文) 幼虫がさなぎになった。

4. 1. 2. 2 「に」格とそれに対応するトルコ語の語尾の形式の相違

日本語の[存在点], [起点], [動作者], [原因], [時間]のそれぞれの用法を表す「に」格とそれに対応するトルコ語の処格の格語尾(/-de/, /-da/), 奪格の格語尾(/-den/, /-dan/), 後置詞的な表現である(tarafından)「～によって」は形式上違うするため、混同及び誤用が起りやすいとみられる。

- (11) Ana kapı -da çok koruma görevlisi ϕ var -dı.
 (逐語訳) 正門 処格 大勢 警備員 主格 いる 過去
 (訳文) 正門に警備員が大勢いた。
- (12) Arkadaş -im -dan mail adresi -(n)i öğren -di -m
 (逐語訳) 友達 限定1人称単数 奪格 メールアドレス 対格 聞く 過去 1人称単数
 (訳文) 友達に/からメールアドレスを聞いた。
- (13) Ebeveyn -ler -im tarafından evlilik -im -e karşı çık -ıl -dı.
 (逐語訳) 親 複数 限定1人称単数 によって 結婚 限定 与格 反対する 受身 過去
 (訳文) 両親に結婚を反対された。
- (14) Fazla ϕ sıcak -tan bayıl -dı -m.
 (逐語訳) 余り 属格 熱さ 奪格 気を失う 過去 1人称単数
 (訳文) 余りの熱さに気を失った。
- (15) Şafak vakti saat 5' -de toplan -dı -k.
 (逐語訳) 早朝 時刻 5 処格 集合する 過去 1人称複数
 (訳文) 早朝5時に集合した。

4. 1. 3 「場所」を表す格形式の種類相違

トルコ語では、日本語の「存在の場所」の用法を表す「に」格と「動作・作用の行われる場所・場面」の用法を表す「で」格に対応するのは1種類の処格の格語尾(/-de/, /-da/=異形態)しかない。日本語では意味によって区別されるが、トルコ語ではそれがないため、混同及び誤用が起りやすいと考えられる。

- (16) Ben İzmir -de doğ -du -m.
 (逐語訳) 私 イズミール 処格 生まれる 過去 1人称単数
 (訳文) 私はイズミールで生まれた。

- (17) Ana kapı -da çok koruma görevlisi φ var -dı.
 (逐語訳) 正門 処格 大勢 警備員 主格 いる 過去
 (訳文) 正門に警備員が大勢いた。

4. 1. 4 「時間」を表す格形式の種類の違い

トルコ語では、日本語の「時間」の用法を表す「に」格と「で」格に対応するのは1種類の処格の格語尾 (/de/, /da/ = 異形態) しかない。「場所」の用法と同様に、「時間」の用法についても日本語では意味によって区別されることに對し、トルコ人学習者にはその使い分けが難しいと考えられる。

- (18) Bu kitap -ı bir hafta -da iade ed -in lütfen.
 (逐語訳) この 本 対格 一 週間 処格 お返しする 願望2人称 ください
 (訳文) この本を一週間で返してください。
- (19) Hafta -da bir kez tenis φ oynar -im.
 (逐語訳) 週 処格 1 回 テニス ゼロ格 する(習慣) 1人称単数
 (訳文) 1週間に1回テニスをする。

4. 1. 5 日本語の「に」格と「から」格の意味用法の違いによる誤用

日本語の与格の格助詞である「に」格が奪格の格助詞である「から」格と置き換えられる場合を除き、トルコ人学習者にとって、「に」格と「から」格との用法が混同しやすいものと考えられる。

- (20) Arkadaş -ım -dan mail adresi -(n)i öğren -di -m.
 (逐語訳) 友達 限定1人称単数 奪格 メールアドレス 対格 聞く 過去 1人称単数
 (訳文) 友達にからメールアドレスを聞いた。
- (21) Kütüphane -den kitap ödünç al -dı -m.
 (逐語訳) 図書館 奪格 本 借りる 過去 1人称単数
 (訳文) 図書館から本を借りた。

4. 2 量的分析の結果

4. 2. 1 第一部の質問項目の分析結果

第一部の回答をまとめた結果、次のことが明らかになった。1年生(15名)と2年生(20名)は、過半数の学生が日本語能力試験に準じるレベルに達している。しかし、3年生(15名)と4年生(20名)では日本語能力試験の合格者数は全員の半分にも達していないことが分かる。この原因として、3年生と4年生では日本語の授業がなく、その代りに日本語で教えられる文学、社会、翻訳、教授法等の科目を受講しているからだと考えられる。これらの授業では日本語の流暢さや語彙、知識に重点がおかれているため、学習者は日本語の文法に関心を持つより、むしろ授業の内容のほうを重要視しているのではないかと思われる。

4. 2. 2 第二部の作文の分析結果

第二部の作文の分析結果から、計18の誤用文のうち10の誤用文は「存在の場所」の用法を表す「に」格と「動作の行われる場所」を表す「で」格との混同で発生した誤用であり、4つの誤用文は「時間」の用法を表す「に」格と「で」格との混同による誤用であることが明らかになった。この原因は、日本語の「存在の場所」を表す「に」格及び「時間」を表す「に」格とそれに対応するトルコ語の処格の格語尾 (/de/, /da/) の相違にあると考えられる。

集めた誤用文を学年別にみると、「に」格と「で」格の誤用は、レベルが上がるにつれて減少する傾向が見られる。その理由として、初級レベルの予備課程で学習した項目は、学習時点ではまだ理解あるいは定着しておらず、学習が進んでいくと定着してくるからだと考えられる。また、作文内の誤用の数は、下記の第三部の選択肢問題と第四部の穴埋め問題で出た誤用の数と比べると少ないことがわかる。それは、学習者が作文では用法の知らない助詞を書かないように配慮したからであろう。

4. 2. 3 第三部の選択肢問題及び第四部の穴埋め問題の誤答の分析

アンケート調査の第三部は30問の選択肢問題、第四部は30問の穴埋め問題からなっている。第三部及び第四部の問題に対する回答をもとに誤答数・誤答率の表を作成した。第三部の選択肢問題の分析結果から、誤答率が最も高い（誤答者はクラス人数の半数にも達している）とみられる学年は予備課程（11問）であり、最も低い学年は2年生（1問）である。予備課程（20名）では、まだ学習されていない文法項目もあるし、既習の文法知識がまだ定着していないことが誤答率の高い理由と考えられる。しかし、2年生になると、文法知識が次第に増えていくと同時に既習の文法項目が定着してきたため、誤答率が低くなるとみられる。一方、3年生の誤答を見ると、下記の問題6～9において最も誤答率が高い（93.3%）ことがわかった。新しい文法項目が増えていくことにつれ、基礎の文法項目を忘れてしまったとみられる。

【調査アンケートの選択肢問題】

6. そのことを誰だれもき聞きましたか。
 1で 2を 3は ④に
7. 雨あめ川かわの水が汚みずくなりました。
 1は ②で 3の 4に
8. 私はスペイン語わたしが分ごからないので英語えいご話はなししました。
 1に 2の 3が ④で
9. 兄あには仕事しごと京きょうと都とへ行いきました。
 1を 2が 3と ④で

そのほか、全体の回答では、次の問題項目において誤答率が高く、トルコ人学習者にとって習得の難しい格助詞の用法と考えられる。ここでは、誤答率の高い順に問題項目を並べておく。

22. 電車でんしゃ傘かさを忘わすれてしまいました。（誤答数60／誤答率66.6%）
 1へ ②に 3で 4が
21. 会社かいしゃ勤つとめています。（誤答数53／誤答率58.8%）
 1で 2を ③に 4へ
20. 大学だいがく合ごうかく格かくしました。（誤答数47／誤答率52.2%）
 1へ 2で ③に 4を
27. 飲み物のはコーヒものーいします。（誤答数45／誤答率50%）
 1を 2と ③に 4で
30. 先生せんせいの指し導どうのもとろんぶん論か文かを書かいています。（誤答数45／誤答率50%）
 ①で 2へ 3に 4と

続いて第四部の穴埋め問題の分析結果を見ると、誤答率が最も高い（誤答者はクラスの人数の半分を超えた）学年は予備課程（19問）であり、ほかの学年ではそれほど大差（約8問）がみられなかった。この理由として、調査アンケートの問題項目には、予備課程でまだ学習していない格助詞の用法もあったからだと考えられる。

全学年では共通として誤答率の高いとみられる問題項目を以下のように高い順に並べておく。

26. 毎晩犬 (に) 泣かれて眠れません。(誤答数64/誤答率71.1%)
20. 私は毎日散歩すること (に) しています。(誤答数61/誤答率67.7%)
24. 昨夜、家 (に) 1) 泥棒が入ったので、警察 (に) 2) 届けました。([に] 2) 誤答数61/誤答率67.7%)
27. 山道 (を) ゆっくり登りました。(誤答数59/誤答率65.5%)
21. アララット山はトルコ (で) 最も高い山です。(誤答数57/誤答率63.3%)
17. 弟はコンヤ (の) 学生寮 (に) 泊まっています。([の] 誤答数53/誤答率58.8%)

上記の格助詞の誤答を見ると、1年生で学習した基礎文法の項目が2年生になると、次第に忘れられていくことがわかった。

第二部の作文、第三部及び第四部のアンケート問題の誤答が多かった箇所には共通性が見られ、「動作が行われる場所」の用法を表す「で」格と「存在の場所」の用法を表す「に」格を問う問題の誤答率が最も高いことがわかる。

4. 2. 4 第三部の問題別及び学生別クラスター分析の結果

クラスター分析を行うにあたって、正答に値1を、誤答に値0を代入し、30問を横軸、学生数を縦軸にした行列を作成した。この数値行列に対してクラスター分析を行った。分析では、クラスター内のデータの平方和を最小にするワード法を使用し、また非類似度としてはユークリッド平方距離を使用した。

それぞれの学年の学習者の回答をもとに作成した問題別と学年別の樹状図(デンドログラム)を使用し、学習者の誤答の傾向を詳しく考察した。例えば下記の図1は、予備課程の学生20名の回答をもとに作成した問題別の樹状図である。この図によって特に、回答の違いや誤答にどのような関係性が見られるのかを示した。

例えば、予備課程の問題別の樹状図は下に示した通りである。学習者の回答をもとに赤い縦線が通る点が決まり、また赤い縦線が通る点によって①と②のように学習者の回答が似通っているものがグループ化される。要するに、①と②のように予備課程の学習者の回答が2グループに大別される。

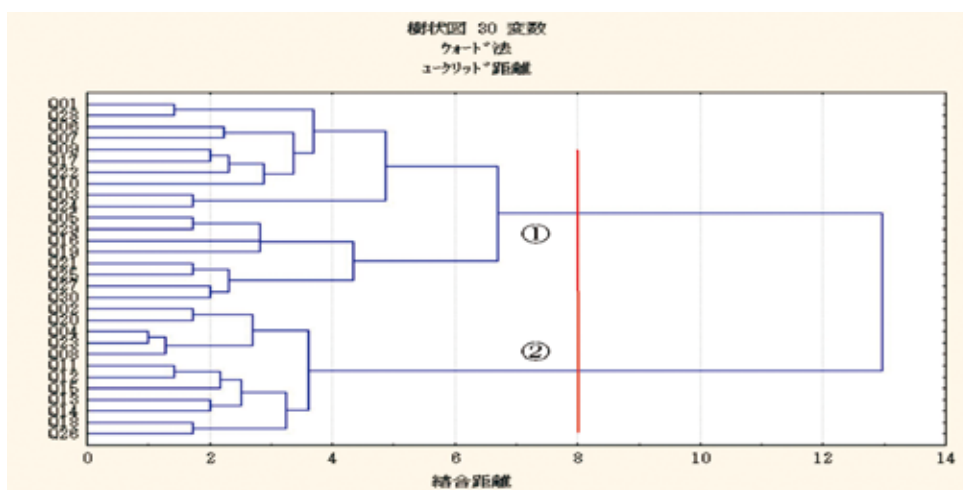


図1 予備課程の問題別の樹状図

次の図は、全学年の学生90名の回答から得られた誤答率をもとに作成した誤答問題別の樹状図である。

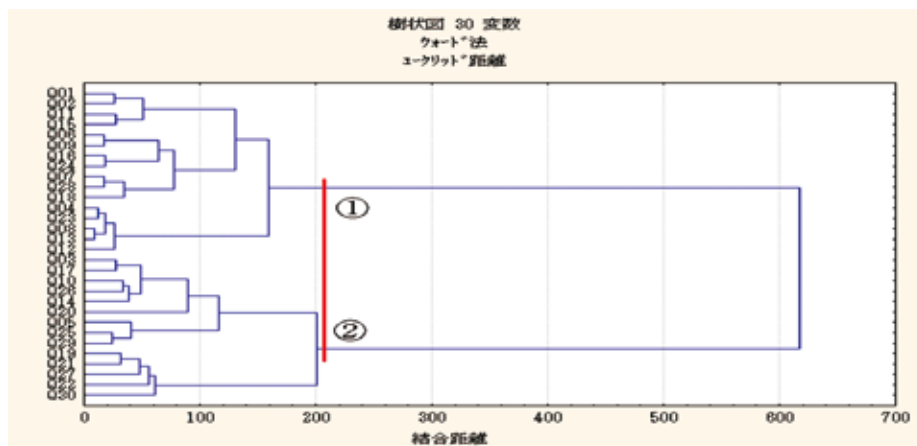


図2 全学年の誤答問題別の樹状図

全学年の問題別の樹状図によるクラスター分析から以下の点が明らかになった。

1. 問題別のクラスター分析では、全学年を通じてほとんど誤用がなかった問題を見てみると、Q01, Q02, Q04, Q06, Q07, Q08, Q09, Q12, Q13, Q15, Q18, Q19, Q23, Q28であり、それらの問題の正答である「に」格の用法は「存在点」, 「起点」, 「時間」, 「要素」であり、「で」格の用法は「道具」, 「原因」, 「理由」である。
2. 誤答数が最も多い問題をまとめてみると、それらの中の3問の正答が「に」格であり、1問の正答が「で」格である。それらの全ての問題の用法は「場所」の用法である。このことから、「動作が行われる場所」の用法を表す「で」格と「存在の場所」の用法を表す「に」格の混同は学年が進んでも継続しており、「に」格と「で」格の「場所」の用法の誤用に化石化が見られると言えよう。
3. 誤答数が次に多い問題を見ると、それも同様に「場所」の用法において誤用の化石化が継続していることが見受けられる。その中の4問の正答が「場所」の用法を表す「に」格及び「で」格であり、2問の正答が「時間」の用法を表す「に」格であり、1問の正答が「要素」の用法を表す「に」格である。このことから、「動作が行われる場所」の用法を表す「で」格と「存在の場所」の用法を表す「に」格の混同、要するに「に」格と「で」格の場所の用法の誤用が起りやすいことがわかる。
4. 問題全体では、正答が「に」と「で」のある問題の誤答率を比較してみると「で」格より「に」格の方が誤答率は高い傾向にあることがわかる。

次は学生別の図である。この樹状図によって予備課程の学生20名の中、どの学生とどの学生の間に類似した誤答の傾向があるのかが分かる。

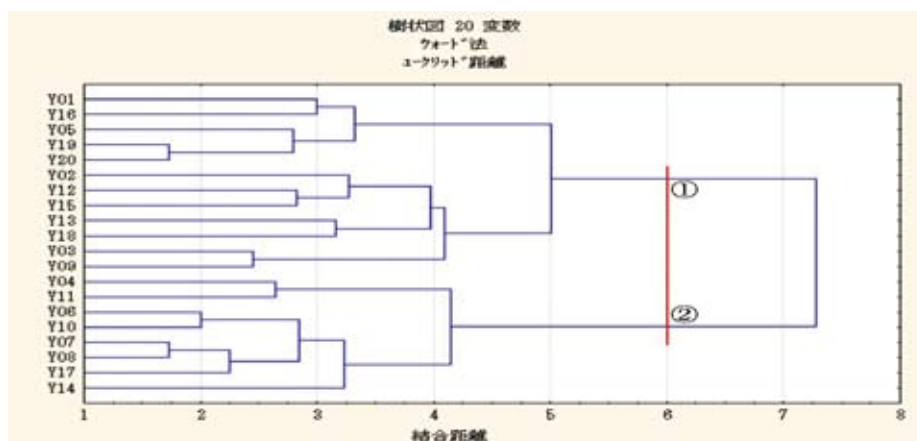


図3 予備課程の学生別の樹状図

下記の図は、全学年の90名の学生間にどのような回答の違いや誤答の傾向があるかを示している。この樹状図によってどの学年とどの学年の学生の回答や誤答の傾向が分かる。

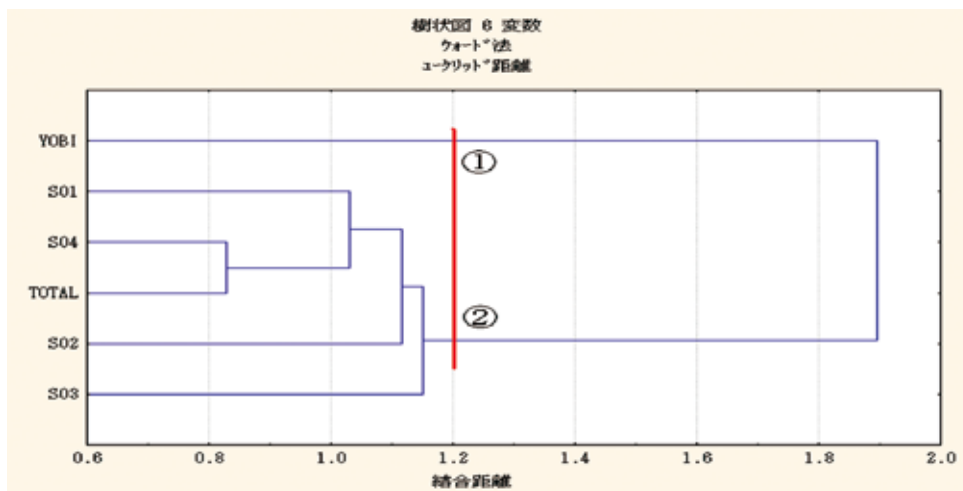


図4 全学年誤答学年別の樹状図

全学年の学生別の樹状図のクラスター分析から以下の点が明らかになった。

1. 学生別のクラスター分析では、それぞれの学年の「に」格及び「で」格の「時間」と「場所」用法に注目し、それぞれの学生が出した誤答数及び誤答率を詳しく考察した。その結果、3年生の「場所」の用法を表す「で」格と「に」格及び4年生の「時間」の用法を表す「で」格にはあてはまらないものの、誤答数が少ないグループの学生と比較し誤答数の多いグループの学生の方が「で」格と「に」格の問題での誤答率が高い傾向にあると言える。このことから、これらのグループ分けが学習者の「に」格と「で」格の誤答数及び誤答率との関係性がうかがえるため、全学年において「に」格と「で」格における学習者の誤用傾向を明らかにしたと言える。
2. 全学年において誤答数と日本語能力試験の結果の間に関連性がみられた。第一部の問題では日本語能力試験に合格したと記述した学生のほとんどは誤答数が少ないグループの学生であり、日本語能力試験を受験していない及び受験したが合格できなかったと記述した学生のほとんどは誤答数が多いグループの学生であることがわかる。

5. まとめ

5. 1 分析結果について

本論文1で述べた目的、すなわち「で」格と「に」格の用法とそれらの用法に対応するトルコ語の格形式、その誤用に見られる傾向に関して、両言語の処格及び与格標識の相違点を4.1の質的分析で述べた。対照分析の結果、19種類の処格用法のうち13種類の用法、及び14種類の与格用法のうち8種類の用法がそれらの用法に対応するトルコ語の格標識と異なっていることが分かった。つまり、構造が似ている言語とは言え、細部には違いがある。トルコ人日本語学習者の誤用例は、そのものが具体的な形で現れていると言える。第2の目的に関して設定した3つの問題、つまり、1.学習者の誤用にはどのような傾向がみられるのか。2.どの用法で誤用が起りやすいのか。3.誤用の原因と思われる要因は何か。について分析した結果、それぞれ次のような点が明らかになった。1) について、学習者は「に」格と「で」格の、特に「場所」と「時間」の用法に関して多くの誤用がある傾向がみられた。2) について、誤答数が最も多い問題をまとめてみると、全ての問題の正答は「場所」の用法を表す「に」または「で」であった。「動作が行われる場所」の用法を表す「で」格と「存在の場所」の用法を表す「に」格の混同は学年が上がっても継続しており、このことから「に」格と「で」格の「場所」の用法の誤用に化石化が見られる。3) について、誤用の原因には、記憶違い、ケアレスミスなど学習者の学習ストラテジーによるものの他、教師の指導方法、日本語そのものの体系や表現の意味用

法、学習者の母語と日本語との違いに基づくもの等、様々な要因が挙げられる。本研究では日本語そのものの体系や意味用法による誤用についても触れたが、誤用分析の結果、誤用のほとんどは学習者の母語と日本語の両言語の文法構造と意味用法の違いによるものであることが明らかになった。本研究の前半で行った対照分析により明らかになった両言語間の相違点と、後半で行った誤用分析により明らかになった誤用の傾向との間には密接な関係があることがわかった。トルコ人日本語学習者の母語であるトルコ語と外国語としての日本語の格形式の類似点は、学習に正の転移を生じさせ、類似する用法がより早く、より正しく身に付けるのに対して、相違点は学習に負の転移を生じさせ、その使い分けを身につけるには、より時間がかかり、困難となる。

5. 2 日本語教育への一提案

チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学・日本語教育学専攻の学習者90名を対象にして実施したアンケート調査では、格助詞の「に」と「で」の使い分けの状況を調査した。その結果、トルコ人日本語学習者が簡単に理解し、正しく使用する用法もあると同時に、多くの誤答を起ししやすい用法もあることを明らかにした。誤答の起りやすい背景には、トルコ語と日本語の間にある相違点のマイナスの影響が原因となるだろう。

しかし、誤用の原因として挙げられるものは単に両言語の相違点だけではないと考えられる。ここでは、次のように考える。学習者の誤用の原因として、両言語の間にある相違点の以外に様々な要素があるが、ここではその一つである、トルコの日本語教育現場の状況とも関係していると考えられる。

チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学・日本語教育学専攻の教師の多くはトルコ語の分からない日本人教師であるため、指導上トルコ語は使用されていないし、トルコ語との相違も理解されていない。また、指導法が直接法であるため、授業中にトルコ語で話すことは禁止されている。授業中トルコ語が使用されないものの、学習者は意識的であれ無意識的であれトルコ語との比較をしながら文法項目を学習することになる。その結果、トルコ語の格形式が日本語の格助詞に対応している場合には早く習得され、より正しく使用される。一方、ある程度類似しているにも関わらず異なる部分がある場合には、その違いを学習することがより難しくなり、正しく習得することは困難になる。そこで、教師が日本語にはあるがトルコ語にはない、あるいは違う用法がある格助詞を教える際、特に予備課程ではトルコ語で補足説明をしたり、トルコ語との相違点を明示したりする必要があると思われる。そうすることによって、トルコ人学習者が日本語の格助詞をより早くかつ正しく身に付けることが可能となるだろう。

5. 3 今後の課題

本研究では、日本語の「に」格と「で」格の特に問題とされてきた用法の使い分けについて考察した。今後の課題として、本研究で取り上げたもの以外の日本語の格形式をも全般的に調査し、主題を表す「は」や主格を表わす「が」格の使い分けや、理解の難しいとされる様々な格の用法やその使い分けを明らかにし、それらに対応するトルコ語の格形式を明らかにしたい。今後、本研究で行ったようなアンケート調査の範囲をより広くすること、またトルコの他の大学や諸教育研究機関で学習しているトルコ人日本語学習者を対象に分析を行いたい。

本稿は、修士論文の一部を修正・加筆したものである。修士論文をまとめるには、多くの方々からご指導ならびにご助言をいただいたことに、ここで深く感謝の意を申し上げたい。また、アンケート調査にご協力くださったトルコ共和国・チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学の先生と学生の皆様に深く感謝している。最後になるが、生まれた時から現在までいつも進学することへのご支援や国から離れ遠くの国に留学させてくれた旧トルコ語・トルコ文学の教員である父親のダルクラン・バフリ氏及び幼いころから自分が教師していた小学校と一緒に連れていってくれた勉強することへの意欲を最初に与えてくれた母親のダルクラン・ギュルセル氏にも心からの深い感謝の気持ちを表したい。

参考文献

- 岡智之 (2005) 「場所的存在論によるデ格の統一的説明」『日語日文学研究』韓国日語日文学会 53 : pp.235-254.
- 岡智之 (2005) 「場所的存在論による格助詞ニの統一的説明」『日本認知言語学会論文集』日本認知言語学会 5 : pp.12-22.
- 国立国語研究所 (1997) 『日本語における表層格と深層格の対応関係 (国立国語研究所報告 113)』三省堂 : pp.119-165.
- 菅井三実 (1997) 「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』名古屋大学文学部 (文学43抜粋) 127 : pp.23-40.
- 菅井三実 (2007) 「格助詞「に」の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』独立行政法人国際交流基金 17 : pp.113-135.
- スリーエーネットワーク (編) (1999) 『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク (編) (2000) 『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』スリーエーネットワーク
- ダルクラン・アイシェ・ヌル (2011) 「日本語の格助詞の使い分け及びトルコ人日本語学習者におけるその誤用の考察—「で」と「に」に関する日本語とトルコ語の対照研究—」東京学芸大学大学院教育学研究科平成22年度修士学位論文
- 日本語教育学会 (編) (2005) 『日本語教育辞典・新版』大修館書店
- 林璋 (1992) 「助詞の意義と用法の体系—格助詞『に』を中心に—」『文化言語学—その提言と建設』文化言語学編集委員会 (編) 三省堂 : pp.516-530.
- 森山新 (2004) 「格助詞デの放射状カテゴリ構造と習得との関係」『日本認知言語学会論文集』日本認知言語学会 4 : pp.66-75.
- 森山新 (2008) 「第8章 場所を表すデとニの違い」『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために』ひつじ書房 : pp.219-228.
- Banguoğlu, Tahsin. (2007). Adlarda Çekim. *Türkçenin Grameri*. Ankara: Türk Dil Kurumu Yayınları: pp.326-331.
- Ergin, Muharrem. (1993). Hal Ekleri. *Türk Dil Bilgisi*. İstanbul: Bayrak Basım / Yayım / Tanıtım: pp.215-230, 209-232.
- Korkmaz, Zeynep. (2007). Ad Çekimi Ekleri. *Türkiye Türkçesi Grameri (Şekil Bilgisi)*. Ankara: Türk Hava Kurumu Basımevi İşletmeciliği : pp.23-25.

注

- 1) クラスタ分析とは、前もってグループに分かれていないデータを、いくつかのグループに分類するために最も一般的に使用される多変量的な解析の手法の一つである。

日本語の格助詞の使い分けとトルコ人日本語学習者の誤用の考察

——「で」と「に」に関する日本語とトルコ語の対照研究——

Japanese Particles' Proper Use and Consideration of Turkish Japanese Learners' Errors:

A Contrastive Study of Turkish and Japanese on “De” and “Ni”

DALKIRAN Ayşe Nur*・許 夏 玲**

DALKIRAN Ayşe Nur, HUI Harling

留学生センター

Abstract

One of the aims of this study is, first of all to present the usages of Japanese case particles “de” and “ni” which are especially difficult for Japanese learners of Turkish native speakers when comparing to those Turkish case forms. Next aim is to analyze the errors of Japanese case particles “de” and “ni” of Turkish learners and also to define the tendency found in the errors. In the contrastive analysis which is conducted on the basis of the usages of Japanese case particles “de” and “ni”, it has been understood that 13 usages out of 19 usages of locative case particles, and 8 usages out of 14 usages of dative case particles are different from those of Turkish case markers. The qualitative analysis of the questionnaire survey was conducted in a total of 90 students of Çanakkale Onsekiz Mart University's Japanese Language Education Department in Turkey. The result shows that the high rate of the errors on expressing “place” and “time” of the case particles “ni” and “de” was the most common. It is proved that the differences between the usages of case particles in both languages are closely related to the reason due to the errors of the case particles “de” and “ni” of Turkish learners.

Key words: Japanese Learners of Turkish Native Speakers, Locative Case, Dative Case, Contrastive Analysis, Error Analysis

Department of International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、まず日本語の格助詞の中でも特に使い分けが難しいとされている「で」格と「に」格の用法とそれらに対応するトルコ語の格形式を提示し、次にトルコ人日本語学習者の「で」格と「に」格の使い分けに見られる誤用を分析し、またその誤用に見られる傾向を明らかにすることである。日本語の「で」格と「に」格の用法に基づいて行った対照分析では、19種類の処格用法のうち13種類の用法及び、14種類の与格用法のうち8種類の用法がそれらの用法に対応するトルコ語の格標識と異なっていることが分かった。トルコのチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学・日本語教育学専攻の学習者計90名を対象に実施したアン

* Okayama University, Graduate School of Humanities and Social Sciences

** International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

ケート調査の質的分析では、「に」格と「で」格の「場所」と「時間」の用法に関する誤答数が最も多かった。対照分析により明らかになった両言語間の相違点と、誤用分析により明らかになった学習者の誤用との間には密接な関係があることが分かった。

キーワード: トルコ人日本語学習者, 処格, 与格, 対照分析, 誤用分析